

CONTENTS

- 令和5年度(2023年度)のFD活動を振り返って
- 特色ある学部取り組み～地球環境科学部～
- FD研修参加報告
- 令和4年度(2022年度)卒業時学修成果・満足度調査結果概要
- 令和5年度(2023年度)全学FD研修実施一覧
- 令和5年度(2023年度)全学FD活動報告

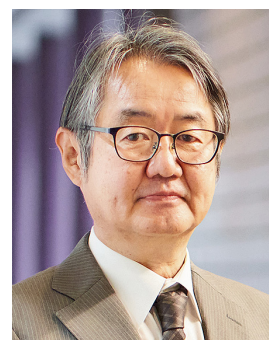
令和5年度(2023年度)のFD活動を振り返って

FD担当副学長 古屋 健

本学ではFD・SDの高度化を進めるため、昨年度より全学教育推進センターにFD・SD研修の情報を集約し、Teamsを使って全学対象のFD研修の概要を効率よく周知できるようにいたしました。「FD/SD_News」というチャンネルを開くと、学内・学外のFD・SD研修情報にアクセスできます。また、本学で実施された過去の研修については、可能な限り動画でも配信するようにしています。来年度からは、全学教育推進センターが改組されて新たに設置される教育開発センターがこの仕事を引き継ぐこととなりますが、引き続き多くの教職員に活用していただけるよう、充実させていきたいと考えております。

さて、令和5年度のFD年間テーマは、「多様な教育手法を活用した授業の展開」でした。このテーマは令和6年度から導入される新LMS、そして令和7年度から実施される105分13回授業を基軸とする新アカデミックカレンダーを見据え、これまで本学で展開してきたアクティブラーニングのさまざまな手法に加えて、ICTを活用した授業、同時双方向やオンデマンドによるメディア授業といったより多様な教育手法について理解を深め、先生方が個々の授業のねらいに即して、より学習効果の高い教育手法による授業を展開できるように支援していくことを目指して設定されました。7月27日に全学教育推進センター主催で開催された「DS学

部における多様に授業の構築と実践—座学からプログラミングまで—(DS学部・成塚拓真先生)」、12月7日に情報基盤センター主催で開催された「教員・職員・学生にとって魅力的なオンライン授業とは—LMSを活用して学びをアクティブに(明治学院大学・根本淳子先生、学校法人新潟総合学園JIGYO企画推進室・竹岡篤永先生)」はまさにこのテーマに相応しい研修でした。未見の方はFD/SD Newsのチャンネル「FD_研修_学内」で資料・動画が公開されていますので、是非アクセスしてみてください。



なお、新年度から新たに導入されるLMSについては全学教育推進センターと情報基盤センターが連携して選定にあたり、OpenLMS(Moodle)に決定しました。現在、本学で活用されているMicrosoft365との相性の良さや、オプションにより多くの機能が装備可能なことなどが決め手となりました。令和6年度には、新LMSの使用法や、その機能を活用した授業実践例の紹介など、授業改善に直結するFD活動を展開していく予定です。多くの方の積極的な参加をお待ちしております。

特色ある学部の取り組み ～地球環境科学部～

地球環境科学部 准教授 北沢 俊幸



立正大学は、平成26年度から令和元年度にかけて、文部科学省の大学教育再生加速プログラム事業（以下、AP事業）に採択され、授業改善やアクティブ・ラーニングの実施に力を注いできた。地球環境科学部では、「タブレットPCを用いた双方向教育」、「予習用動画の作成と公開」、

「学生主体のフィールドワーク実習」、「リアル授業視聴の収集と活用」の4つのプロジェクトを掲げ、大学においてAP事業を牽引する役割を担っていた。そのなかで、「学生主体のフィールドワーク実習」への取り組みをさらに発展させるために、平成27年度より「学生研究プロジェクト」を立ち上げ、AP事業を終えた今でもフィールドワークの支援を継続的に実施している。

この「学生研究プロジェクト」とは、地球環境科学部の学生が学科・ゼミの垣根を越え、自らが立ち上げたプロジェクトに1グループあたり20万円を上限に助成する企画である。ただし、助成対象となるのは、旅費、宿泊費、消耗品費、運送費、図書資料費、外部委託費、雑費、印刷製本費などに限られ、教員の研究補助となるような課題や卒業論文のテーマは対象とはならない。あくまで、研究内容は、学生が主体的に課題を見つけ、フィールドワークに根ざして解決するテーマでなくて

はならず、助成期間内に成果が期待できる、具体的な研究を対象としている。プロジェクトの指導者として教員は参加するが、基本的にテーマ設定や研究方法、予算配分などは全て学生同士の話し合いで決めさせ、学生ならではの発想力と行動力を発揮して仲間と協力して行うフィールド調査を支援することが目的である。

公募期間は5月下旬～6月中旬で、一次書類審査を通過したグループは6月下旬に研究内容に関する二次審査のプレゼンテーションを行い、その後に採否が決定される。なお、令和5年度は、環境システム学科の「学修の基礎1」におけるグループワークのひとつとして、研究プロジェクトの模擬的な発表を行い、「学生研究プロジェクト」への関心を高める取り組みも実施されている。

実質的な研究期間は7月から2月までではあるが、年度末の地理学科もしくは環境システム学科の卒業研究発表会において、研究成果を発表することを課しており、3月には研究報告書も提出することとなっている。令和2年はコロナ禍で実施が見送られたものの、令和5年度には韓国へフィールドワークに出かける学生も現れ、国際的な活動へと輪を広げつつある。また、研究成果を論文として投稿したグループもある。今後もこの「学生研究プロジェクト」を通して、フィールドワークへの関心を高めつつ、問題解決へ意欲的に取り組む学生の育成を目指していきたい。

過去の採択研究テーマ一覧

2015年度	水稲と麦の二毛作地域における生物多様性の特徴 地図を用いた移動の際に人が参考にする地理情報について
2016年度	人が植物の分布拡大に与える影響 観光資源に対する地元住民と観光客との評価の差異—山形県を事例として— 埼玉県に生息するヤリタナゴの地域固有性は保たれているか？
2017年度	建造物が与えるスズメへの影響—熊谷市内調査からの考察— MOMOTARO～現在の周辺環境からさぐるゆらいの地の検証～ 福島県南会津郡只見町における観光ワラビ園の成立と利活用
2018年度	観光地における名産品PR—ご当地ソフトクリームを事例として— 秩父地域におけるセメント関連産業に関する観光資源化の検討 鳩間島と西表島における星砂と太陽の砂の分布について
2019年度	山梨県甲州市勝沼におけるブドウ園とワイナリーの関係性 小笠原諸島の母島に生息する海生貝類の分布～人工海浜と自然海浜を比較して～
2021年度	「ぶらっと湧水巡り」～人の生活と水の関わり～ 夢京橋キャスルロードが地域に及ぼした影響
2022年度	温暖化によるクマゼミの国盗り合戦～最前線の熊谷市と松本市～ 伊豆諸島におけるコーガ石の分布及びその希少性の調査 伝統的宗教共同体の分布に関する地理学的研究 川崎市宮前区における御嶽講の活動を事例に 東京都青ヶ島村における食料品入手方法からみた島内外の結びつきの変容
2023年度	害虫調査隊が行く。埼玉県内の新害虫 <i>Shingapora shinshana</i> の分布！

2023年7月13日 全学FD 研修会「令和5年度外部アセスメント（GPS-Academic 1・3年生）報告会」

2023年7月13日に開催されたFD 研修会では、株式会社ベネッセiキャリア「大社接続営業部」の黒田紀夫氏より、5月31日まで実施したGPS-Academic（1・3年生向け）の結果に関する報告がありました。本学は2022年度からこのプログラムを導入し、「学修者本位」の教育の実現と「質の保証」を目的とした教学マネジメントを目指し、学修成果を目に見える形で示す取り組みを行っています。

GPS-Academicは、複雑な問題に対する学生の問題解決能力を、「思考力」、「姿勢・態度」、および「経験」という3つの異なる観点から評価するテストです。教職員にとっては、学生が授業や指導をどう捉えているかを理解し、現代の変化する社会環境に適応した支援を提供するための重要なツールとなります。また、学生にとっては、自身の問題解決能力の現在のレベルを知り、成長を実感し、将来の目標設定に役立てることができると期待されています。

受検結果の報告では、まず1年生の学部ごとのデータと、入試区分に基づくデータが示されました。このデータは、入試区分によって学生の成長の軌跡が異なる可能性を示唆しており、今後の教育方針の策定に役立つ重要な情報です。「思考力総合」スコアでは、各学部の最高点数が示されましたが、思考力と他のスコアとの間に必ずしも直接的な相関は見られませんでした。個々の学生の特性と現状を正確に理解した上で、個別指導していく重要性を示唆しています。また、3年生のデータでは、思考力は高かったものの、自己管理能力を示す「経験」のスコアが低い事例がありました。このアンバランスが今後の教育指導において重要な焦点となります。

続いて、「学生意識調査」の結果が報告され、1年生が大学選択に際して「どのような価値観を持ち、どの情報源を参考にしたか」などが明らかにされました。それによると、高校の先生との面談や情報交換が重要な役割を果たしており、高校と大学の連携をより強化することは、募集戦略という観点から、考慮すべき重要な要素であると感じました。さらに「志望度・納得度」や「学生生活の不安」といった他の質問からも、多角的な視点での興味深い結果が得られました。3年生の結果では、「大学の魅力」や「履修選択の考え方」などの項目が報告され、学生の大学生活に対する満足度や教育への評価が示されました。本学はGPS-Academicを全学的に導入してから2年しか経過しておらず、1年生と3年生の経過分析は行われていませんが、他大学の事例を参考にした「学修成果」の分析が紹介されました。今後このような分析が可能になれば、教育プログラムの改善に役立つと考えます。

今回のような学生向け調査では、結果の分析に留まってしまうことが多いですが、それだけでは不十分であると思います。ベネッセiキャリアの支援を活用し、学生一人ひとりの多様性を考慮した細やかなフォロー体制を構築することの重要性を感じました。このアプローチは、大学や教職員にとっても、学生自身にとっても有益な取り組みです。また質疑応答の際に触れられましたが、学生が自らの「姿勢・態度」を伸ばし、主体的な学びと成長を実現できるようなプログラムの開発が望ましいと考えます。今回の全学的な分析に加え、各学部別のデータ分析も可能ということですので、これからの詳細な分析とその活用に期待しております。

令和4年度(2022年度)卒業時学修成果・満足度調査結果概要

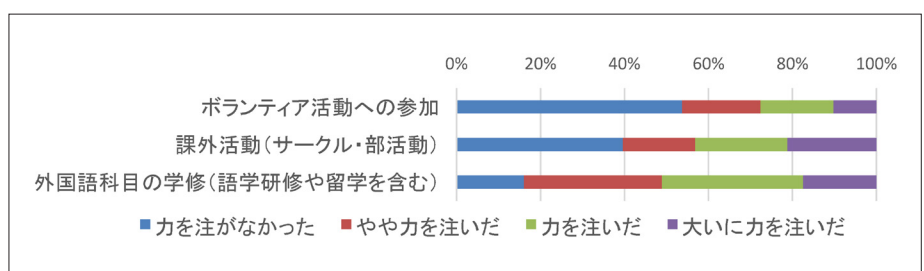
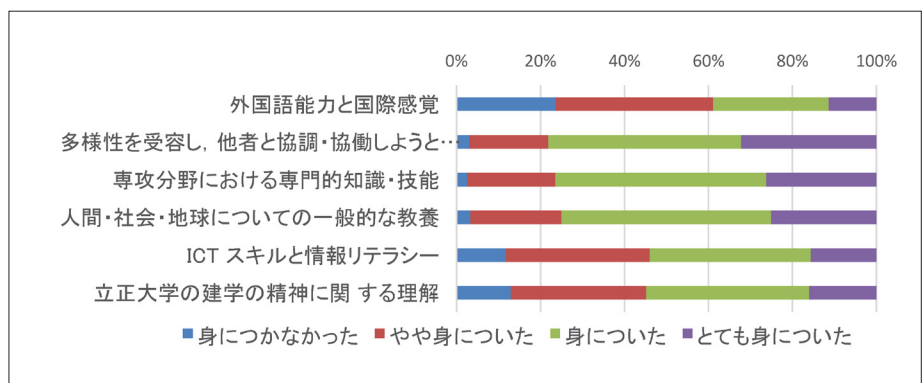
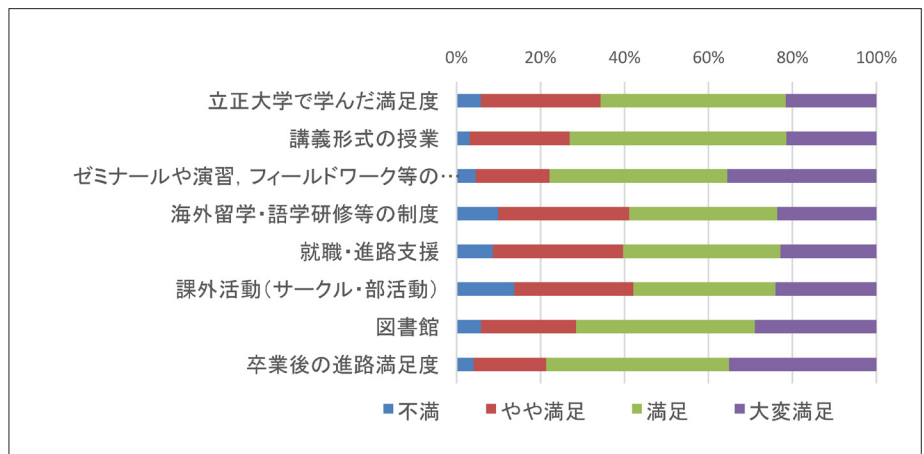
立正大学では、授業方法・内容の改善、学生支援の拡充や施設・設備の充実を踏むことを目的として、4年間本学で学び卒業する学生を対象とした、卒業時学修成果・満足度調査を実施している。

立正大学で学んだ満足度は「大変満足」「満足」を合わせた満足率が65.7%であり、おおむね高い満足度であった。詳細をみると、「ゼミナールや演習、フィールドワーク等の授業(77.8%)」「講義形式の授業(73.0%)」「図書館(71.5%)」は、7割を超える満足率となっており、本学の強みといえる。他方、「課外活動(57.9%)」「海外留学・語学研修等の制度(58.8%)」「就職・進路支援(60.3%)」は、満足率が5割強にとどまった。卒業後の進路満足度は、「大変満足」「満足」を合わせた満足率が78.7%であり、おおむね高い満足度を示していた。

立正大学で身についた能力に関する成長実感について、「とても身についた」「身についた」を合わせた達成率をみると、「外国語能力と国際感覚」を除き、5割以上の成長実感を有していた。なかでも成長実感の高い能力は、「多様性を受容し、他者と協調・協働しようとする態度(78.2%)」「専攻分野における専門的知識・技能(76.4%)」「人間・社会・地球についての一般的な教養(74.9%)」であった。成長実感があまり高くなかった能力は、「外国語能力と国際感覚(38.8%)」「ICTスキルと情報リテラシー(53.9%)」「立正大学の建学の精神に関する理解(54.8%)」となっていた。

卒業生アンケートを通してみてきたことは、立正大学全体に対する卒業生の満足度や進路に対する満足度はおおむね高いものの、継続して高い満足度を保つための努力が求められていることである。特に、満足度の

低かった「課外活動」「海外留学・語学研修等の制度」は、とくに注力していく必要がある。この背景として、大学4年間で注力した内容に関して「ボランティア活動への参加」や「課外活動」「外国語学修」の比率が低く、4年間の学修成果の実感においても、「外国語能力と国際感覚」が低いことがあげられる。つまり、満足度の低い結果が示された内容は、卒業生自身が大学生活において力を入れてこなかったからだと思われる。一方、満足度が低めであった「就職・進路支援」、成長実感の低かった「ICTスキルと情報リテラシー」や「立正大学の建学の精神に関する理解」については、大学側のさらなる改善が必要であることが示された。



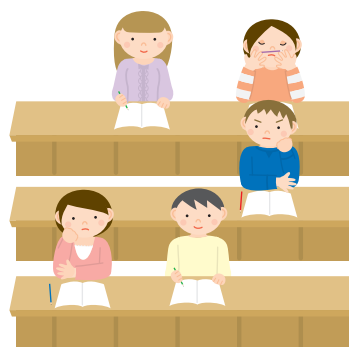
令和5年度(2023年度)全学FD研修実施一覧

開催日	主催	内容	開催形態	教職員参加者数
7月13日(木)	全学教育推進センター	<p>研修名：令和5年度外部アセスメント (GPS-Academic 1・3年生) 報告会</p> <p>概要：2023年5月31日までに実施した、GPS-Academic (1・3年生向け) の結果データについてベネッセキャリア社より報告をいただいた。全学1・3年生の集計データのみならず、学部や入学試験ごとの集計データ等の報告もしていただき、今後、本学でGPS-Academicを有効に活用していくための議論の素材を提供していただく機会となった。</p>	オンライン	18名
7月19日(水)	社会福祉学部	<p>研修名：発達障害の学生が抱える困難と支援のあり方</p> <p>概要：教員はそれぞれの専門はもちろん、近年配慮が必要な学生 (ASD、LD、ADHD 等を中心に) の心身の状況に適切に対応していく力も求められている。それぞれの特性の紹介からそのような傾向にある学生との関わり方、支援の在り方、障害学生支援室との連携等について共有し、出席者との意見交換を通して、学部 (大学) 内での理解を深めることとなった。</p>	オンライン	64名
7月27日(木)	全学教育推進センター	<p>研修名：DS 学部における多様な授業の構築と実践 ～座学からプログラミングまで～</p> <p>概要：多様な教育手法を活用した授業の展開についての実践報告として、本学熊谷キャンパスに2021 (令和3) 年度に開設したデータサイエンス学部の成塚先生にご登壇いただき報告がなされた。開設されたばかりの学部で担当している科目の授業を構築する中で、様々な授業形態への対応や、文系・理系・強化クラブそれぞれ異なる学力の学生へのフォローなどいくつもの壁があり、どのように取り組んでいったのか具体例を踏まえながらの紹介があった。</p>	オンライン	14名
10月18日(水)	地球環境科学研究科	<p>研修名：文学研究科改革への取組 －大学院単位取得制度を中心として－</p> <p>概要：収容定員充足率悪化の傾向を分析し、改革の取り組み、特に大学進学希望者の拡大工夫の紹介がなされた。中でも在学生の大学院単位先取履修制度の現状など、グッド・プラクティスを共有し、自研究科の課題解決にも資する意見交換の場となった。</p>	対面・ オンライン	52名
12月7日(木)	情報環境基盤センター	<p>研修名：教員・職員・学生にとって魅力的なオンライン授業とは －LMS を活用して学びをアクティブに－</p> <p>概要：コロナ下を経験したことによってオンライン、オンデマンドの形式が当たり前のようになってきているが、その形のひとつとしてLMSの重要性が一層周知されてきた。 一方で、授業の魅力を引き出す方法や学生の知識・満足度を満たすための効果的なアプローチを検討しながらも、それを実践するまでには至っていないのも事実となっている。 そこで学生がアクティブに学べるオンライン授業事例を紹介し、それらの特徴を踏まえて授業の魅力を高めていくことを目的としたID (インストラクショナルデザイン)、LMS (Learning Management Systems)、学習管理システムを活用した授業をどのように実施できるかを考えるための機会となった。</p>	オンライン	16名

令和5年度(2023年度)全学FD活動報告

〈全学FD研修以外の主な活動内容〉

5月22日	令和5年度第1回FD委員会開催
7月3日～15日	令和5年度第1期授業改善アンケート実施
12月4日～16日	令和5年度第2期授業改善アンケート実施
10月21日・23日	令和5年度第2回FD委員会開催
12月1日～1月31日	令和5年度卒業時学修成果・満足度調査実施 ※3/21(卒業式)まで延長
2月26日	令和5年度第3回FD委員会開催
3月22日～4月8日	令和5年度学修成果・満足度調査実施
3月22日～4月8日	令和6年度新入生アンケート実施(GPS-Academicを活用)



編集後記

立正大学には9つの学部があり、それぞれの学部で特徴的なFD活動や授業改善が行われています。そこで、Vol.30から各学部の特徴的な取り組みを紹介することにしました。文部科学省の大学教育再生加速プログラム事業を牽引してきた地球環境科学部を皮切りに、順

次各学部の取り組みを紹介していく予定です。他の学部の取り組みを参考とすることで、大学全体のFD活動がさらに活性化することを期待しています。

(地球環境科学部 教授 川野 良信)

立正大学FD活動の詳細は、大学公式サイトより閲覧できます



RISSHO UNIVERSITY FD News Letter Vol.30

令和6年3月31日発行

編集発行：立正大学 全学教育推進センター

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

TEL：03-3492-6613 FAX：03-5487-3345 URL：https://www.ris.ac.jp